
私とお嬢様と紅茶

藍空

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

私とお嬢様と紅茶

【Nコード】

N7292B

【作者名】

藍空

【あらすじ】

彼女は今日も私の淹れた紅茶を飲みながら本を読む。私は彼女を、愛している。

「あら、もうこんな時間。坂野、お茶を淹れてきてちょうだい」
「かしこまりました」

古いアンティーク家具が並んだ部屋で、彼女は本を読んでいた。
彼女の美しくて長い金髪がサラサラと風になびき、輝く。それが
眩しくて、私は目を細めた。

「お茶の種類はいかがいたしましょう？」

「そうね……アップルでいいわ。熱いお茶がいい。ああそれと、窓
を閉めてちょうだい。寒いわ」

彼女は本に目を落としたまま、私にそう告げる。確かに風に彼女の
髪はなびいている。キラキラと、美しく。ゆっくりと首を動かし、
私は窓のある方を見る。

しかし……。

「失礼ですが、お嬢様。窓は開いております」

「そんなわけないでしょう。風が私に向かって吹いているわ。坂野、
私に無駄な言葉を発せさせないで。窓を閉めると言ったら、閉める
のよ」

彼女が声を荒げる。が、本から目を放す様子はなかった。狂った
ように本に釘付けになり、私に次々と命令を下す。私は、渋々もう
一度窓を見やった。

いつもと変わらぬ、完全に閉まった窓。それだけが私の目にうつ
る。試しに、窓に近づいて触れてみた。ひやりと冷たい。思った通
りの感触が私の腕を走り、脳へ届いた。

風は、そんな窓から吹いている。

「坂野、何をしているの？ 全く……。じゃあ、いいわ。お茶を淹
れてきて」

「はい、申し訳ございません」

彼女の不機嫌な声が聞こえ、私は窓から離れた。私よりも四歳年

下の彼女に、ぺこりと頭を下げる。相変わらず、彼女の目は本に落とされていた。

台所に行き、アップルの茶の葉が入った缶を手取る。カラン、と音をたてて缶の蓋を開けると、香ばしくも甘い林檎の香りが鼻をついた。アップルなんて洒落た紅茶を飲まない私は、香りを楽しむだけでうっとりとなった。きっと美味しいんだろうな、と心の中で呟き、同時にお嬢様のことを考える。

お嬢様は、アップルがお気に入りだ。きっと、毎日のようにアップルの香りや味を楽しんでいたのだろう。そう、たった今私が味わっているような、この感じを。

ハッと我に帰り、紅茶を淹れ始める。ティーポットにティーメジャーで量った正確な量の茶葉を入れ、お湯を静かに注ぐ。それから蓋を閉めて蒸らし、小さな白いカップに出来上がった紅茶を注いだ。それを皿に乗せ、ミルクと砂糖を添える。お嬢様の喜ぶ顔を想像しながら、それを持って部屋へと戻った。

「お嬢様、アップルです」

「ありがとうございます。テーブルに置いてちょうだい」

お嬢様は、まだ本から目を離していなかった。私は、お嬢様の傍らに置かれた小さなアンティークのテーブルの上に、紅茶を置いた。「……どうぞ、召し上がってください」

「ええ」

お嬢様は本から目を離さずにティーカップを手にとり、静かに口につけた。ゆっくりと、カップを傾ける。やがて、彼女の喉がコクン、と小さな音をたてた。

「……坂野」

「なんでごさいましょうか」

「温度が低くないかしら。あなた、ティーポットを温めてからお茶の葉を入れたの？」

私は、ハツと思い出す。そうだ、温めていない。

「申し訳ありません、淹れ直してまいります」

「もういいわ！ 全く、あなたのような使えない使用人は初めてよ。このメアリの使用人となったことを誇りに思い、覚悟を決めて行動して欲しいわね」

彼女は怒る。しかし、本から目を離さない。私は、もう一度深々と頭を下げながら謝る。そのまま、つい頭に浮かんだ言葉を発してしまった。

「お嬢様も、覚悟をお決めになってはいかがですか？」

言ってしまった後に、後悔する。そつと顔を上げると、彼女はお茶を持ったまま静止していた。少々震えているのがわかる。

「何が、言いたいのかしら」

「言っても良いのですか？」

「……言ってちょうだい。何を覚悟するの？」

彼女は、依然本から目を離さなかった。私は、ゆっくりと口を開く。

「おわかりでしょう。わからないのなら、本から目を離して風の吹いてくる方を見てください。そこに、使者がいます。私には見えませんが、いるのです」

私は、少し声を荒げる。もう止まらない、全て話してしまおう。そう思った。

「あなたは、亡くなったんです。二十年前の夜中にね。あなたの本当の体は、もうここには無いのですよ。さあ、顔を上げて。窓から飛び出せば、使者が導いてくれますから」

必死に訴えると、お嬢様は急激に震えだした。

「い、いや……！ いやよ……！ 私はここにいたい。ここで、アップルが飲みたいの！」

「あちらでも、アップルは飲めますよ」

「飲めないわ！ あなたの淹れた不十分なアップルは、あっちじゃ飲めない！」

その言葉に、私はハツとなる。そして、自分の目から一筋の涙が流れているのに気づいた。

「あなたの……あなたの淹れたアップルが飲みたい」

お嬢様は必死だった。彼女の膝の上の本に、ぼたぼたと涙が降る。彼女も泣いていた。

「……わかりました。私も後を追います。だから、顔を上げましょう。あなたの美しい顔が見たい」

私は優しく語りかける。何か柔らかいものを抱きしめるような口調で、ふわりふわりと。

お嬢様は、顔を下げたまますっかり冷めたアップルを口に含み、飲み下した。

そして……。

ああ、愛しいお嬢様。

私はあなたを愛していた。

だからこそ、はやく死んで欲しかった。

あなたが命を失ったときの美しい顔を、早く見たかった。

あなたは、私の淹れた死のアップルを躊躇い無く飲んだ。

それから、あなたは死んでからも私のアップルを欲しかった。

あなたは辛そうだった。

私も辛かった。

私はあなたを愛している。本当に愛している。

だから、約束は守ります。安心してください。ね？

（後書き）

初投稿なのでした。

まだまだ未熟な身ですが、批評や感想をお待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7292b/>

私とお嬢様と紅茶

2010年10月8日15時16分発行